

# 02

## - THE CITY AS A DIMENSION - NUAS×HGB 国際交流展報告

### - THE CITY AS A DIMENSION - A report of exchange exhibition between NUAS and HGB

映像メディア学科・教授  
*Department of Visual Media • Professor*

**渡部 真** Makoto WATANABE

映像メディア学科・准教授  
*Department of Visual Media • Associate Professor*

**小笠原 則彰** Noriaki OGASAWARA

映像メディア学科・専任講師  
*Department of Visual Media • Lecturer*

**伏木 啓** Kei FUSHIKI

映像メディア学科・助教  
*Department of Visual Media • Assistant Professor*

**村上 将城** Masakuni MURAKAMI

## はじめに

本稿は2013年6月7日から28日まで、HGB Gallery(ライプツィヒ、ドイツ)にて開催された国際交流展“THE CITY AS A DIMENSION”(都市:新たな様相)の報告である。本企画は、ライプツィヒ視覚芸術アカデミー(Hochschule für Grafik und Buchkunst Leipzig)と本学映像メディア学科との交流をもとに、2011年に愛知県美術館にて実施した国際交流企画『都市のまなざし - 可視と不可視のあいだ / “Cityscapes - In between the visible and invisible”』を発展させたものである。日本とドイツという異なる文化的背景を持つ学生が、「都市」という共通したテーマをもとに、どのような写真 / 映像を提示できるのかを試みた展覧会であった。本稿では、プロジェクトの背景と経緯に触れたうえで、交流の成果について報告する。



写真1,2:「都市のまなざし」展示風景/2011年/愛知県美術館ギャラリー

## 1 企画背景

### 1.1 ライプツィヒ視覚芸術アカデミー / Hochschule für Grafik und Buchkunst Leipzigについて

交流校であるライプツィヒ視覚芸術アカデミー / Hochschule für Grafik und Buchkunst Leipzig(以後HGB)は、ドイツを代表する美術大学の一つであり、約600名の学生がグラフィックデザイン

ン、ファインアート、写真、メディアアート、製本を専門的に学んでいる。1764年に設立されたZeichnungs-Mahlerer und Architectur-Akademieを基礎とし、1950年に現在のHGBとなった。印刷技術を学ぶ学校としての歴史的特性を色濃く残していることから、全ての学生が1年次に製本技術の基礎を学ぶというユニークなカリキュラムとなっている。東西統一後の1990年代より、画家のNeo Rauch(ネオ・ラウフ)、写真家のHans-Christian Schink(ハンス=クリスティアン・シンク)、Ricarda Roggan(リカルダ・ロッグン)などの作家を多数輩出し世界的に注目されるようになり、現在では、ドイツの美術大学を代表する高等教育機関の一つとなっている。



写真3:ライプツィヒ視覚芸術アカデミー

## 1.2 高等教育におけるドイツと日本の写真教育の差異

ドイツの美術大学における写真 / 映像は、芸術表現としてあり、コマーシャリズムとは距離を保つのが一般的である。そのため、学生が制作する写真も、風景に内在する「歴史」にアプローチしたものや、都市が表象する「現代社会」への批判的眼差しを投げかけたコンセプチュアルな作品が多い。近年、日本でも大規模な個展を開催した写真家:Andreas Gursky(アンドレアス・グルスキー)も、初期の作品では、日本の証券取引所の様子やアメリカの巨大スーパーマーケットを対象とし、それらを消失点の無い均質な空間として構成することで資本主義経済や消費社会の不気味さを浮かび上がらせる作品を発表している。そのようなドイツ写真の歴史を礎とし、HGBの教育方法も、リサーチやコンセプトメイキングを重視する傾向がある。

一方で、日本は、ドイツとは異なる背景を持っている。近代以降に性急に西洋文化を輸入した日本においては、写真は必ずしも「芸術」の系譜にあるものではない。むしろ、広告媒体を通して写真に触れることの方が多く、必然的に受け手にとって訴求力のある視覚的な「インパクト」を重んじる傾向がある。従って、高等教育においても、ドイツのような芸術写真としての独立した文脈を前提とするのではなく、広告と芸術を往復しながらその境界を曖昧とする教育機関も多々ある。そのような背景があるためか、日本の

アート写真は、コンセプチュアルな要素よりも、一見、広告写真や雑誌の一部を彩っているかのような軽さを伴った、感覚的 / 抽象的なイメージを持つ作品が多い。(もちろん、そのような状況に批判的な作家も多く、社会に対し批評的視座を持つ作品も日本には多々あることを付言しておく。)

## 1.3 交流展のテーマ設定について

今回の交流展にあたって、HGB側より提案があったのは、下記のコンセプトであった。

The City: Creating a Dimension(都市:創造的様相)

Located between the actual space of the global city and the imagery of the artists/photographers, a dimensional space opens up: a previously unidentified exchange promotes a clash of different new viewpoints and creates controversial artistic matter.

グローバル化された都市の中の現実の空間と、アーティストの想像の間にある特性(=もうひとつの次元)を創造しながら、複数の様相を持った空間が開ける。

また、展示タイトルは「THE CITY AS A DIMENSION(都市:新たな様相)」に決定した。

上記を受けて、今回のプロジェクトでは、「都市」に対し具体性を持ちながら多様な視点でリサーチが可能な場所として、次の3つのロケーションに限定することにした。

- 中川運河
- ショッピングモール
- 都市における空き地 / コインパーキング

「中川運河」は、名古屋中心地と名古屋港を結ぶ運河で、かつては近代産業を支える役割を担っていた。しかし現在では、物流としてはほとんど使用されなくなり、周辺の倉庫群も老朽化しつつある。遠景に見える真新しい高層ビルと、近景の古びた倉庫群の対比など、歴史や景観に対し様々なアプローチが可能な場所である。

「ショッピングモール」はグローバリゼーションの象徴であるかのように、瞬く間に全国(あるいは世界中)に広がっている。その一方で、地域を支えてきた小売店は経営を続けられず都心の商店街でさえ空き店舗が目立つようになってきている。

「空き地」は、日本の大都市において、そのほとんどがコインパーキングに変わりつつある。都市における経済システムや効率化を象徴する場所とも捉えられる。

敢えて、これらのロケーションを絞り込むことで、「都市」という抽象的なテーマ設定にのみ込まれず、具体的に作品制作に取り組むことを示唆した。

## 2 制作・展示

### 2.1 制作過程

はじめに国際交流展の企画について本学映像メディア学科全学生へ告知し、希望者を募った。前述したコンセプトやロケーションなどを説明し、定められた期日に個々で撮影した写真や映像のスケッチを提示し、それをもとにディスカッションの場を設定した。敢えてドイツの教育方法を取り入れ、リサーチやディスカッションをベースとした作品制作を促しながらも、ドイツと同様のコンセプチュアルな方向性に傾倒するのではなく、学生たちが潜在的に持っている個々の感覚を伸ばすよう配慮した。最終的には、コンセプト、制作過程などを総合的に判断し、岩田芽子、若山雅佳(大学院メディア造形研究科2年)、稲川有紀、岡田真悠子、倉田健司、三上潤基(映像メディア学科4年)の作品を選出しドイツにて展示することに決定した。また岩田、岡田、倉田の3名が現地を訪れ展示設営、プレゼンテーションを行うことになった。

### 2.2 展示 - 設営

2013年5月31日にドイツ・ライプツィヒに着き、翌日には展示ギャラリーの下見を行った。展示プランの再考とプレゼンテーションの準備を行ったうえで、6月3日朝にHGBの本プロジェクト担当教員となるJoachim Brohm教授、Heidi Specker教授、Anna Voswinckel助手、及び現地参加学生達と顔合わせを行った。その後、学生達同士で各作品を持ち寄り、Anna助手が作成した仮プランをベースに展示レイアウトの確認、決定が行われた。



写真5: 展示準備



写真6: 展示設営風景



写真7: 展示設営風景



写真4: HGB GALLERY下見



写真8: 展示設営風景

6日のオープニング前にドイツ/日本双方の学生達による作品プレゼンテーションが行われた。本学から参加した学生達も英語で作成したコンセプトシートを基に、各自の作品を解説した。慣れない英語でのプレゼンテーションであったが、ゆっくりと確実に話し、質問には多少戸惑いながらも懸命に答え、初めての英語でのプレゼンテーションを乗り切っていた。ドイツ到着より毎日のように行っていた英語スピーキングの練習が功を奏したようであった。



写真12: 作品プレゼンテーション



写真9: 作品プレゼンテーション

展示オープニングではHGB学長: Ana Dimke教授、Jochim Brohm教授、本学映像メディア学科学科長: 渡部眞教授がそれぞれスピーチを行った。Brohm教授は、日本の写真作家を紹介しながら日独の歴史的な関係や本展開催意図を説明し、渡部学科長からは本展開催への感謝と、アートが日独をつなぐ重要な要素であることが伝えられた。オープニング会場にはアカデミー関係者だけでなく、現地メディアや一般市民等が多数訪れ大変な賑わいを見せた。その後、HGBの学生達が自主的に企画した中庭での立食パーティーとなり、夜遅くまで交流が続いた。参加した学生たちも、日本とは異なる大学の開放的な空気と、ドイツ人学生との会話を楽しんでいるようであった。



写真10: 作品プレゼンテーション



写真13: HGB学長 Ana Dimke教授スピーチ



写真11: 作品プレゼンテーション



写真14: 渡部学科長スピーチ



写真15:プロジェクト参加学生



写真17:HGB Gallery エントランス

## おわりに

前述したように、ドイツと日本における写真・映像の高等教育のあり方は異なる。しかし、今回の交流を経て、教育方法や環境の差異があるからこそ、双方の学生にとって刺激となり、個々の作品が持つ新たな可能性を見いだす場となることを実感した。実際、本学科より参加した学生は、ドイツ人学生の作品に対する考え方—例えば、政治的な主題について—に驚き、自身の制作意図や動機を見つめ直す契機となったようであった。

帰国前にBrohm教授、Heidi教授、Anna助手とのミーティングを行い、今後も国際交流プロジェクトを継続していくことを合意した。予算的な兼ね合いより、複数年の間隔をあけて実施することを前提としつつも、定期的な交流を持ち、双方の学生たちに異文化に触れるきっかけを設定することの意義や方法について話し合った。

帰国後、Heidi教授より各方面から今回の交流展の評判がとても良いとの嬉しい知らせが届いた。交流展の継続が日本とドイツを繋ぐ一助となり、双方の学生達にとって知見を深める機会となることを願い、本交流展の報告とする。



写真18:展示記録



写真19:展示記録



写真16:HGB Gallery エントランスホール



写真20:展示記録



写真21: 展示記録



写真25: 展示記録



写真22: 展示記録



写真26: 展示記録



写真23: 展示記録



写真27: 展示記録



写真24: 展示記録

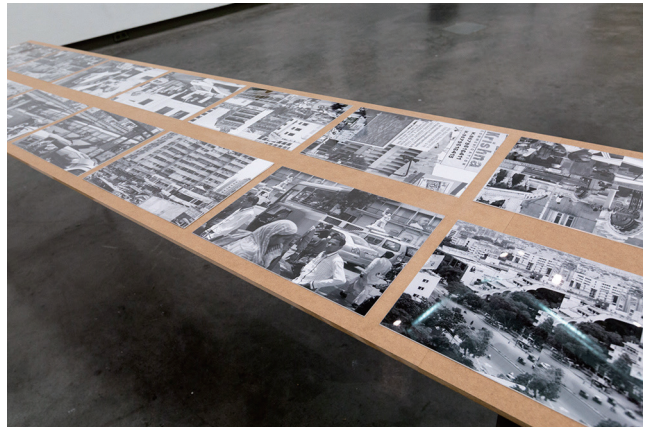


写真28: 展示記録